```
\documentclass{jsarticle}
\begin{document}
\title{課題 1 --- \LaTeXe の練習}
\author{学科専攻 \\ 番号氏名}
\date{2016 年 10 月 18 日}

\maketitle

\begin{abstract}
\LaTeXe についてのこれまでのまとめと補足の文書を用いた練習である。
太字の部分は\LaTeXe が勝手にしたものである。
\end{abstract}

\tableofcontents

\section{\TeX の歴史}

\subsection{\TeX}

Turing(チューリング) 賞、京都賞を受賞したコンピュータ科学者 Donald E. Knuth(クヌース) は
{\it The Art of Computer Programming}の第 1 巻を 1968 年、第 2 巻を 1969 年、
第 3 巻を 1973 年に出版した。第 1 巻の第 2 版まではすべて職人が活字を組む活版印刷で作られた。
第 2 巻の第 2 版はいったんコンピュータで組版されたが、出来上がりにクヌースは失望し、
出版を見合わせ、活版印刷に劣らない美しい組版の出来るコンピュータソフトウェア\TeX
の開発を開始し、第 2 巻第 2 版を\TeX により組版し 1981 年に出版した。

クヌースはその後も\TeX やフォントの改良を行い、1982 年に現在の\TeX とほぼ同じものを
完成させた。\TeX はフリーソフトとして公開されている。

\subsection{\LaTeX}

\LaTeX は DEC(現 HP) のコンピュータ科学者 Leslie Lamport(ランポート) が 1982 年頃開発した
\TeX から発生したバージョンである。、文書整形のコマンドよりも
テキストの構造に神経を集中させることで、
ユーザが組版にかける手間を省けるように一群のコマンドを\TeX に追加した。
1993 年に\LaTeXe という新しい\LaTeX ができた。

\section{\LaTeXe の文法の要約}

\begin{itemize}
```

\item ソースファイルの拡張子は\verb|tex|である。
\item ソースファイルの先頭に半角で\verb|\documentclass{jsarticle}|とかく。
\item 本文は\verb|\begin{document}|と\verb|\end{document}|ではさむ。
\item 本文は地の文と\LaTeXe のコマンドからなる。
\item コマンドは\textbackslash で始まり、(\verb|\西暦|など一部の例外を除き)
半角英字を用いる。
\item コマンドと地の文の間には半角空白をいれる。
ただし、コマンドの後ろに数字が続く場合は空白をいれる必要はない。
\item コマンドは引数を取るもの(たとえば、\textbackslash title)と
単独で用いるもの(たとえば、\textbackslash maketitle)がある。
\item 半角アルファベットの大文字と小文字は区別される。たとえば、
\verb|\large|と\verb|\Large|と\verb|\LARGE|は別のコマンドである。
\item 10 個の特殊文字\verb|# $ % { } _ ^ ~ \|はそのまま入力しても出力されない。
\item ソースファイルの改行と組版された文書の改行は別である。
\item Math\'ematiques の{\'e}ようなアクセントは
\verb|\'|などのコマンドを用いる。
\end{itemize}

\section{環境}

\LaTeX は文書構造を環境により実現している。環境は

```
\begin{verbatim}
  \begin{環境名}
  本体
  \end{環境名}
\end{verbatim}
```

で表される。

これまでに扱った環境には以下のものがある。

\begin{enumerate}
\item abstract
\item center
\item description
\item enumerate
\item flushleft
\item flushright
\item itemize

```
\item quotation
\item quote
\item verbatim
\end{enumerate}

\begin{flushright}
以上
\end{flushright}
\end{document}
```